

開催報告 第13回全国学校飼育動物研究大会
(平成22年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会(岐阜)市民公開講座)

全国学校飼育動物研究会 会長 宮下英雄

日時：平成23年2月13日(日)午前9時25分～午後4時30分
会場：長良川国際会議場メインホール
テーマ：新学習指導要領と学校動物飼育～知の創造につながる飼育体験～
記念講演：村山哲哉先生 「子どもの学びと飼育体験」
参加者：約500名(教員・大学・教育委員会など教育関係者、獣医師会員、保護者、マスコミ 他)
開会：来賓挨拶
文部科学省 初等中等教育局教育課程課学校教育官 山田素子様
岐阜県教育委員会 教育長 松川禮子様
主催者挨拶
社団法人 日本獣医師会 顧問 北村直人 全国学校飼育動物研究会 会長 宮下英雄
社団法人 岐阜県獣医師会 会長 近藤信雄

来賓の教育関係者は、新学習指導要領に継続する動物飼育体験の必要性が明記されたことに言及して、日頃の獣医師の支援に感謝を述べられた。また動物愛護法改正に関わっておられた日本獣医師会北村顧問は、より良い飼育活動の実現を望むと述べられた。

参加者は、地元である岐阜県内の教育関係者が多かったが、北海道から沖縄までの、全国38都道府県から約500名を数えた。文科省をはじめ、教師、教育大学生や教育委員会、PTAなど教育関係者は320名であった。教育委員会指導主事の方々は、岐阜県、福井県、三重県、名古屋市、京都市、東京都から19名が参加されていた。また、各県の獣医師会を代表して参加された獣医師会員が目立った。

内 容

最初に中川美穂子日本獣医師会学校動物飼育支援対策検討委員会副委員長が、全国55地方獣医師会の活動に関する調査結果を報告し、自治体と獣医師会の契約事例は、全自治体の1割強であるが、7割に獣医師会の支援体制が準備されていることを示した。そして日本獣医師会がまとめた「飼育支援のための地方獣医師会の活動のガイドライン」を示した。

次に平成9年から県と連携して支援活動を進めてきた岐阜県獣医師会の村田憲彦副会長が、岐阜県獣医師会がすすめてきた動物飼育支援対策と、『いのちの授業』実践の概要を報告なさった。

<記念講演>

文部科学省初等中等教育局の理科担当の村山哲哉教科調査官が、平成23年4月から全面实施される学習指導要領について、お話になった。特に、体験と言葉が重視され、全教科を通じて、言語活動の充実や体験活動の充実を基礎に教育を行うことを示された。体験活動の一つである飼育活動に関しては、特別活動の他、教科の生活科でも重要視され、2年間に渡り必ず行うことと明記されている。理科においても、4年生の「人の体のつくりと運動」の単元などにも、学校飼育動物を活用し、あるいは継続観察するなどの活用を明記していることや、飼育に際しては、地域の専門家である獣医師の支援も得て、動物との触れ合い体験を充実してほしいと述べられた。

<口頭発表>

- 1 愛知県半田市立宮池幼稚園吉良智子教諭と榎戸裕子園長が「心も知も育つ 親子飼育活動一家庭や地域との連携を通して」と題して、5年計画で講演会やふれあい実習を開催して、家庭に働きかけて丁寧な飼育活動を実践してきた経緯と子どもたちの声を紹介した。なお休日に動物を預かる保護者が書いた(里親日記)を資料として展示したが、2月21日の日本教育新聞に紹介されていた。
- 2 梅木孝彦群馬県高崎市立東小学校教頭は、小規模校ながら1、2年生の教室でウサギを飼っている様子と委員会活動も報告し、学校中でウサギを可愛がって楽しんでいる様子を紹介された。なお、教室飼育のウサギは休日には家庭に持ち帰る様子も示し、地域との協力も報告された。
- 3 地域獣医師として学校に関わっている(社)群馬県獣医師会の阿部温氏が、教室内飼育校、屋外飼育校、飼育無し校における動物飼育前と飼育1年後の向社会的行動及び共感性の発達への影響について、群馬大学の発達心理学教室と共同研究の結果を報告した。その中で動物を身近に感じられる室内飼育は子どもの発達に良い影響を与えることが示唆されたとの報告があった。

4 32年間も伝統的に沢山の動物を飼育して児童を育ててきた岐阜県本巣市立弾正小学校の安藤富美子教諭が、目的、方法、地域との連携、獣医師会との連携について詳しく報告された。特に2年に一度、児童が、地域の交通整理などの支援をうけて動物みこしをかついで市中を練り歩く「ランド祭り」の様子に聴衆は驚きを示した。また、児童の親が、自分が小学生だった時代のランド祭りの道具が大事に使われていると喜ぶなどの話があり、伝統の力を感じさせた。

5 厚生労働関係の県行政に勤める岐阜県獣医師会の加藤樹夫氏が、県獣医師会が獣医師の職域に関わる人と動物の関係を、夫々の専門獣医師が7回に分けて小中学校の授業を担当していることを報告した。中でも公衆衛生部門の加藤氏は「食べ物の安全と安心」を担当され、食肉生産風景も紹介し、その重要性を児童生徒に伝えるためのご苦労や難しさを教育関係者との協力関係により克服できたことを述べられた。指導するに当たっては、獣医師と学校とが十分に話し合っただけで子どもたちの年齢や経験、発達状態に対応したプログラムを作成することが必要であることを実感した。

<パネル発表>

- 1 「継続飼育・教師と子どもと保護者とともに」 京都教育大学附属幼稚園
- 2 「飼育活動から広がる世界一総合的な学習の実践を通して」 愛知県田原市立泉小学校
- 3 「京都市における生活科・いのちーいきもの大すきの実践を通して」 京都市立美豆小学校
- 4 「動物飼育で、子どもや教師が感動するとき～4059名の子どもと161名の教師のアンケートを通して～」 岐阜県岐阜教育事務所教育支援課
- 5 「学生と学校飼育動物」 岐阜大学・学校飼育動物サークル「学校いきものがかり」
- 6 「岐阜県での『いのちの授業』実践」 (社) 岐阜県獣医師会
- 7 「石川県における学校動物飼育支援の状況と展望」 (社) 石川県獣医師会
- 8 「全国の動物飼育支援体制ー市区町村の獣医師たちー」 (社) 日本獣医師会

どの発表にも、みな、「子どものために」との思いがあふれていたが、中でも、4のアンケート調査についての発表では、担当者から子どもたちへの言葉が示されていた。担当者は、4000以上の素敵な子どもの声に接し、思わず返事がしたくなって、学校に手紙を書いたとあったが、子どもも、関わる大人も感動させる飼育体験の奥深さを示していた。

講 評

鳩貝太郎副会長が、以下のように述べて、閉会した。

日本獣医師会の報告から、全国への飼育支援体制の広がりを知ることができて心強く感じた。また今回は、日本獣医師会の年次大会と一緒に開催されたので、各県の獣医師会の役職の方々が多く参加されたが、このことから獣医師会の学校飼育動物への支援体制づくりが一層進むものと期待している。

実践研究の弾正小学校の事例は、他ではなかなか真似できないような立派な飼育を中心にした全校の指導体制でした。しかし、少数のチャボやウサギの飼育でも、丁寧に飼育すれば十分に効果は得られことを申し上げておきます。特に単なる飼育だけでなく、継続飼育をしながら生と死などのドラマチックな体験と本や専門家からの学びを繋げること、それらを表現すること、伝えることなどの指導が大切である。宮池幼稚園の園児たちの学びの過程は素晴らしい。飼育の成果に関する調査研究は条件の統一と因果関係の分析などが難しくこれからの研究に期待をしたい。各学校の状況を踏まえて飼育動物の位置づけを検討し、地域との協力も進めながら教師自身が動物飼育を楽しむことが大切であると感じた。今回の園・小学校の発表では、なにより子どもたちの楽しそうな様子と、子どもたちの動物への心遣い、そして先生方のおっしゃる「おだやかな子どもたち」という言葉が印象的であった。

この研究会での研究発表が少しでも多くの先生方を勇気づけ、交流できる機会になればと思っている。獣医師会や参加者の皆さんの支援をいただき本研究会の活動を一層充実させたい。

以上